

潟環境研究所ニュースレター

Wetland Environment Research Laboratory, City of Niigata



第 9 号 2018年12月
新潟市

潟と人とのより良い関係を探求し、潟の魅力と価値を再発見・再構築。

- ・ 佐潟と御手洗潟は砂丘湖ではない! … P. 2~3
- ・ 鳥屋野潟がってんプロジェクト … P. 4~5
- ・ 勝手気ままに潟食文化体験!?
- アンナ隊長「潟を食べる!!」 … P. 5
- ・ 潟研とびっくす … P. 6~7
- ・ 潟のエッセイ … P. 8

写真：五十嵐 初司

じゅんさい池環境保全活動

五十嵐初司 潟環境研究所外部相談員／東山の下コミュニティ協議会副会長

じゅんさい池は、現在、東池と西池の2つの池から構成されています。過去には東池・中池・西池と3つの池が確認されていましたが、昭和40年頃から始まった周辺の宅地開発により中池は埋められ、東池と西池の水は昭和54年に枯渇しました。翌年昭和55年1月に工業用水を導水し、旧笹神村のじゅんさい池からじゅんさいを移植して現在の姿となっています。しかしながら、長期展望もないまま、対処的な管理の中で長年放置された結果、外来種のミシシippアカミミガメやクサガメ、鯉などの放流が進み、園芸スイレンが繁茂する池へと変わってしまいました。

5年ほど前に地域コミュニティ協議会で、街おこしの一環として、「じゅんさいが繁茂する砂丘湖」の復活をテーマに活動を開始しました。昨年は試験的に西池の園芸スイレンの一部抜根を行いました。その結果、今年のじゅんさいは昨年の3倍ほどの面積で繁茂しました。

本年度は東区自治協議会の提案事業に取り上げられ、さらなる加速をすることが出来ました。特に昨年は1回しか行えなかった園芸スイレンの抜根作業が春と秋の2回行う事になり、周辺の葦の伐採作業も可能になりました。そしてもう1つのテーマである「砂丘湖」についての検証も行います。この2つのテーマをより確実にするために、8月より西池の水抜きを行っています。最初は順調に水位が下がっていたのですが、最近では下がり方が少なくなってきてい



復活してきたじゅんさい (写真右上の群落)

ます。ある意味地下水の復活が考えられるのかと、わずかな望みも出てきています。学術的な調査は一度も行われていませんが、今後の結果次第では地域の財産となる貴重な砂丘湖が証明されることを期待しています。

なお、本事業は5年前地域コミュニティ協議会の小さな事業として始まり、現在は東山の下小学校・東区自治協議会・区役所などの協力のもと、より大きな事業となりつつあります。引き続き、地域の財産は地域が主体となって関わって行けるような事業に成長させたいと考えています。



カメトラップで捕獲されたクサガメとミシシippアカミミガメ (協力：潟環境研究所協力研究員 井上信夫氏)



佐潟と御手洗潟。長辺を同じ方向に向けて隣合う潟です。この2つの潟は従来から砂丘湖と考えられてきました。そうお思いの読者の方も多いのではないのでしょうか。しかし、両潟とも砂丘湖ではないことが、近年の地形・地質学的な調査からわかりましたので報告します。ところで、何をもって「砂丘湖」とするのかですが、ここでは、文字通り「砂丘上に形成された水域」を砂丘湖とします。



写真1 佐潟と御手洗潟

1. 佐潟、御手洗潟とその周辺の地形

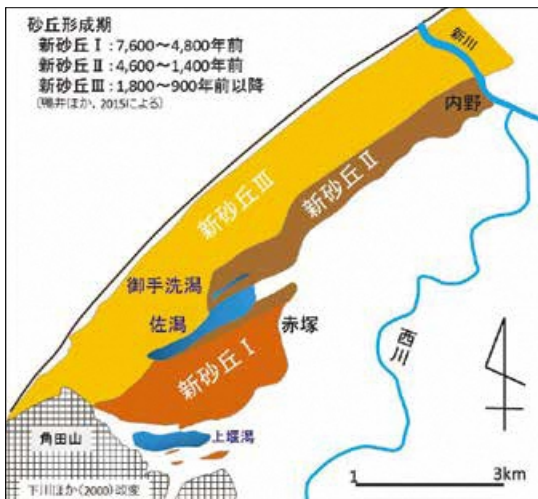


図1 新潟砂丘南西部の砂丘

佐潟と御手洗潟は、新潟市西区の西端に位置する細長い形の潟です。この二つの潟は従来、図1のように、砂丘中に位置すると考えられたため、砂丘湖とされてきました。

確かに、厚い砂層からできている地形に囲まれているのですから、そう思われても不思議はありません。

しかし、調査を進めていくと、どうもそうではないことがわかってきました。すなわち、新砂丘Ⅰ、新砂丘Ⅱとされてきた地形は全体的に起伏に乏しく、砂丘というよりむしろ台地に近いような形状をしています。土地改良や宅地開発によって今ではわかりにくくな

っていますが、以前は、図2に示したような直線状の高まりとその間の凹地とが平行して並ぶ様子がみられました。

これらの高まりは、地形学的には「浜堤(列)」と呼ばれ、海の波の作用によって、後述するバリアーの表面に形成されたものです。風に飛ばされた砂が堆積してできる砂丘とは明らかに異なります。そこで本稿では、これまで新砂丘Ⅰ、同Ⅱと考えられてきた地形を、新たに浜堤列帯Ⅰ(新砂丘Ⅰ)、浜堤列帯Ⅱ(新砂丘Ⅱ)とします。これに対して、越前浜や四郷屋といった集落の位置する海岸沿いの新砂丘Ⅲ(図1、2)は、かつては起伏に富み砂丘特有の地形が数多く見られたことから、砂丘であることは間違いありません。新砂丘Ⅲは、図3に示したように浜堤列帯Ⅱを厚い砂層で覆っていると考えられます。

もう一つ、この周辺の地形を語る上で重要なのが「角田・弥彦断層」という活動度の高い活断層の存在です。後述するように、この活断層より東側の地盤は大きく沈降し、それによって本来あるべき地形が地下に埋没しているのです。

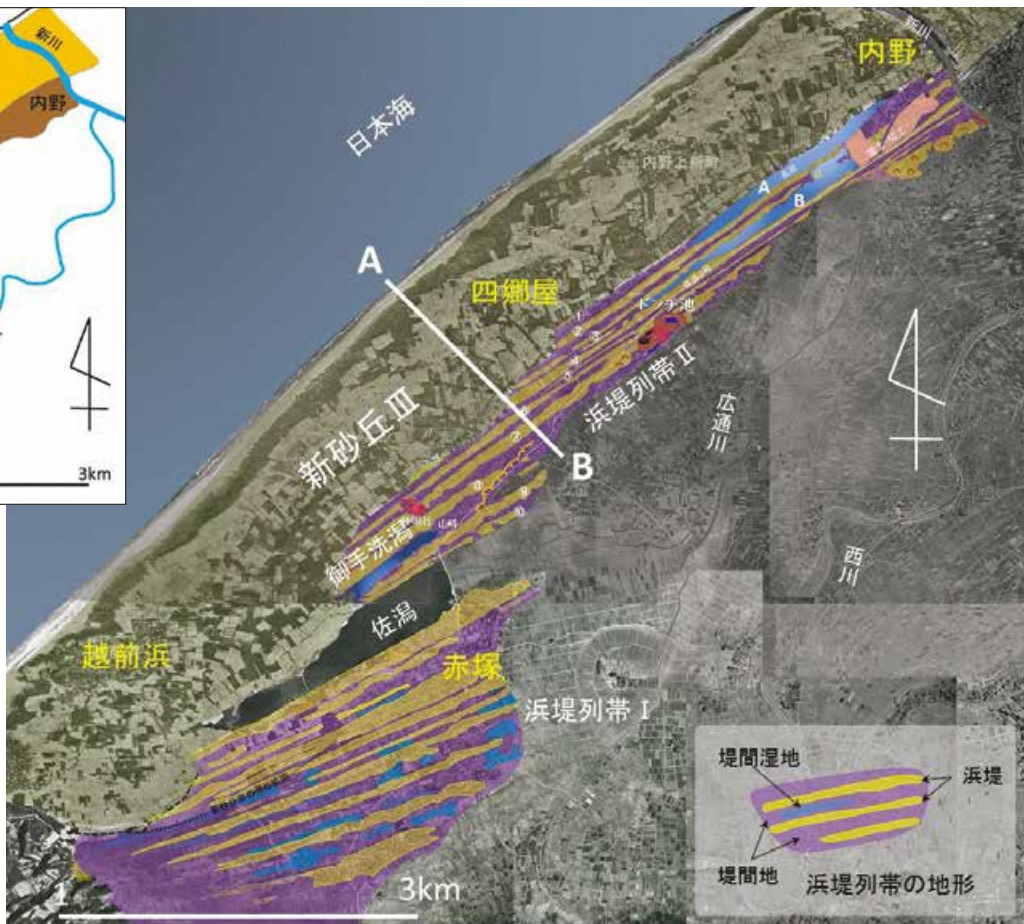


図2 新潟砂丘南西部の新砂丘Ⅲと浜堤列帯の分布

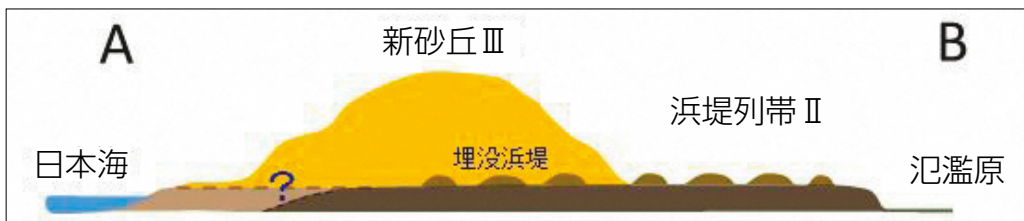


図3 新砂丘Ⅲと浜堤列帯の模式断面図

2. 佐潟の起源

図4は、新潟大学のト部厚志氏らのグループが明らかにした埋没バリアー（黄色で着色された部分）の分布を簡略化して示したものです。バリアーは沿岸州とも呼ばれ、沿岸流によって運ばれた土砂が海岸線に平行に堆積して形成される微高地のことです。またバリアーによって閉塞された水域をラグーン（潟湖）と言います。これらの地形は、海面低下等によって海岸線が退くと次第に陸化します。そうしてできた地形は各地に分布します。ところが、西蒲原地域ではバリアーが陸化どころか、北側の列で地表面下-5メートル前後、南側の列で同-20メートル前後にも及ぶ深さに埋没してしまっているというのです。そして、この埋没の原因が上述した角田・弥彦断層の活動だと考えられています。ト部氏らの図にこの断層を入れてみると、断層より東側でバリアーが埋没していることがわかります。

一方、断層よりも西側（佐潟側）では地盤はむしろ隆起傾向にあることが明らかとなっています。このため佐潟の南側に位置する浜堤列帯Ⅰは、東側の埋没バリアーともとは一続きの地形であったにもかかわらず、埋没せずに標高10メートルほどの高さの台地状の地形をなしています。また、佐潟の北側の浜堤列帯Ⅱも地表面の標高が8メートル前後と高くなっていますが、これは浜堤列帯の形成期が新しいため、沈降が生じていないことによるものと考えられます。

以上のことから、佐潟の起源は図4に示したバリアー（イ）と（ロ）の間に形成されたラグーンということになります。但し、角田・弥彦断層が通過しているため、断層よりも東側はバリアーもラグーンも埋没してしまい、水がたまるような凹地は残っていません。これに対して、断層の西側は沈降から免れたため浜堤列帯Ⅰ、Ⅱをのせるバリアーが台地状に残るとともに、ラグーンの凹地もそのまま保存されました。この凹地こそが佐潟の起源であり、その生い立ちは砂丘湖とは全く異なります。なお、ラグーンのことを日本語では潟湖（せきこ）と呼んでいますので、佐潟はその生い立ちを示したとてもよい地名だといえます。

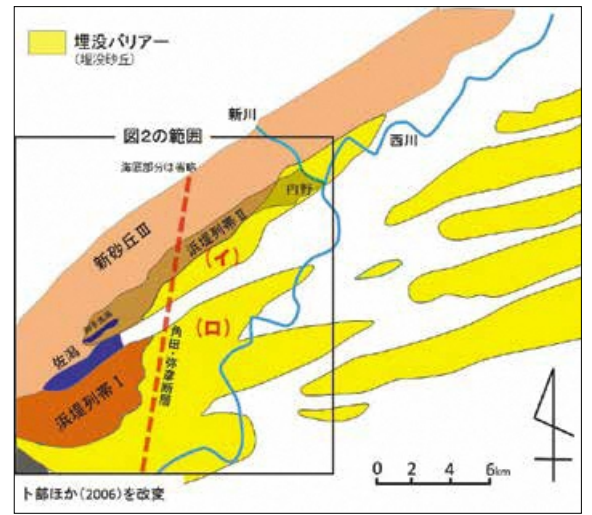


図4 西蒲原地域における埋没バリアーの分布

3. 御手洗潟とは何か

御手洗潟は、佐潟の150メートルほど北側に位置し、全長930メートル、平均幅70メートルあまりの細長い形をしています。この潟もこれまで砂丘湖と認識されてきました。しかし、御手洗潟が位置するのは上述したように砂丘ではありません。浜堤列帯上の細長い凹地である堤間（湿）地が湛水したものです（図2）。この浜堤列帯には、同じ成因の潟がかつて内野側にも2カ所あったことがわかっています（図2）。このうちAの潟は長潟と呼ばれていました。Bの潟については名称を確認できませんでしたが、どちらの潟も御手洗潟よりも長く、全長2.2~2.3キロメートルもありました。

いずれにせよ、これらの潟も地形的に砂丘とは関係のない位置にありますので砂丘湖ではありません。堤間が湛水したものですので、「堤間湖」と呼ぶのがふさわしいのではないかと考えます。

4. 潟を満たす水はどこからくるのか

図5は、海岸線から新砂丘Ⅲをこえて佐潟南岸にいたる地形断面（図6）をカシミール3Dによって作成し、それに地下水面の位置を組み入れたものです。この図から地下水面の分水界は、新砂丘Ⅲの稜線付近の標高7.5メートル付近にあり、そこから



図5 佐潟・御手洗潟から日本海までの地形断面と地下水面

地下水は海側と陸側に分かれて流動していることがわかります。陸側（南東方向）に向かう地下水は、御手洗潟で標高6.5メートル、佐潟で5メートルの高さに地下水面が位置しています。この高さは両潟の湧水地点の高さともほぼ一致します。地下水面も河川と同様、上流から下流に向かって高度差があることで流動しますが、ここでの高度差は新砂丘Ⅲの存在によって生まれるものです。その意味で新砂丘Ⅲは佐潟、御手洗潟の水源ということが出来ます。さらに、佐潟北岸の湖岸線にみられる湧水地は佐潟から山崎、木山と続いて、線状の湧水帯を形成していることがわかりました。この湧水帯については調査例がないのですが、非常に興味深い現象です。



図6 地形断面の位置と線状湧水帯

- 文献：
 ト部厚志・吉田真見子・高濱信行（2006）越後平野の沖積層におけるバリアー・ラグーンシステムの発達、地質学論集59：111-127。
 鴨井幸彦・田中里志・安井 賢（2015）暦年較正年代による新潟砂丘列の形成年代の見直し、第四紀研究54：139-143。
 新潟市（1998）平成9年度 佐潟周辺地下水調査業務報告書、新潟市市民局環境部環境対策課、134ページ。
 下川浩一ほか（2000）日本海東縁部における地震発生ポテンシャル評価に関する総合研究（第Ⅱ期平成9～10年度成果報告書）65-85。

■都市に里川、里潟が成立するのか？

都市で「里潟」が成立するのか、成立できる条件は何かを悶々と考えていたら、引用したい明快な切り口の論文がありました。



空芯菜の栽培かごを持ち上げ、ひげ根を見せる相楽さん

【ミツカン「水の文化」15号里川の構想から引用編集】

里山が「使いながら守られた共有資源」で、「守る仕組み」を持っていた。人々によって使いながら守られているコモンズ（※）として機能していた。里山の利用者（里の住民）と消費者（都市住民）の構図でみると、利用者は利用対象に想い入れ（＝関わり）をするが消費者は金銭の対象（≠関わり）でしかない。

※共有地をさす。

「里潟」の成立には、そこに里潟の利用者やその仕組みの存在と持続が条件だと理解しました。

■里潟の新しい利用者を生み出す開発を！

現在、潟の「利用者」は漁民だけで、その他はイベント参加の「消費者」に過ぎません。「利用者」を生み出すには、いつでも潟中に入れて眺めも楽しめる潟辺の環境と仕組みが必要です。そのため、潟辺には最小限のインフラとして、テラスや木道、カフェ、水辺利用を見守る棧橋付きの舟小屋などが不可欠です。潟を次世代に宝として引き渡すためにも、古くて新しい舟利用ができる潟、魅力が発展する潟にしたいと考えています。

潟で施設やカヌーなどのシェア利用ができ、朝夕カヌーで昼仕事という高質なライフスタイルを実現したい。世界に発信できる「潟ライフブランド」を確立し、潟人が観光ガイドする、そんな未来のシーンを夢見ています。

大事なのは、水質が改善され澄み切った潟になったら外国人観光者も沢山来るようになる、という先々のことではなく今現在の取組です。潟の環境再生のプロセスそのものが、子どもたちにとっても楽しいものでありたい。他の潟湖にも転用できるノウハウを実証試験で開発したいと考え、問題解決型の「汚濁」対策でなく、上流農地から潟に落ちてくる肥料分を「もったいない栄養分」としてとらえ、その利用法の開発をテーマに取り組んでいます。その方が、ワクワク感があり若者も参入したくなる、がってん=潟（発）展プロジェクトです。

■鳥屋野潟がってんプロジェクト2018の紹介

7人のチームが、中学生や専門学校生、水辺の会員、新潟県、亀田郷土改などの協力で、多様な試行事業に挑戦中です。（詳細はフェイスブック参照）<https://www.facebook.com/gattenprojectteam/>



潟湖版の持続可能な潟と人との関係開発目標SDGs（2030年目標）

里山竹林の再生と里潟再生が循環する竹筏事業

竹林と里潟を再生する竹筏のいろいろな使い方を試しています。これはヨシなど潟生産物の新たな利用循環を促す意味もあります。

空芯菜の水耕栽培竹筏事業

水質改善、潟野菜、浮き漁礁、環境学習、竹林再生など一石七鳥の水耕栽培事業です。700株を収穫し、チッソ分約2kg（※机上計算）を潟外に出しました。

潟のマコモ湿地復元とシジミ定着試験事業

マコモ根を竹ポットに入れて岸辺に植え、沖合で浄化力の高い二枚貝シジミの定着を試験しています。

■今後の課題は潟中の環境浮島実験

潟中の浅い砂地盤のところでは子どもたちでも水中ウォーク（水深50～60センチメートル）が楽しめます。そこに治水上問題が無く、水質改善や稚魚の巣になる潜堤的な浮島を設け、利用時には湖上テラスに変身するという、環境を巧みに利用した景観島の実現をめざしたい。

これらの実証試験成果を見極めつつ、新しい湖面利用を2030年までに実現したい。そのためには、潟と流域の総物質循環量分析など多様な研究が必要です。それらを産官学民連携での取組としたいと考えています。



潟底の砂地を感じられる潟ウォーク



舟から空芯菜の収穫体験



マコモ竹ポット植えの環境体験



ヤマトシジミ定着試験放流



勝手気ままに潟食文化探検!

アンナ隊長 「潟を食べる!!!」③



このコーナーは、アンナ隊長こと隅 杏奈（潟環境研究所研究員）が、潟周辺地域の人々から教わった潟の食材を実際に食べてみる！という企画。

今回は、がってんプロジェクトで栽培された鳥屋野潟産空芯菜と鳥屋野潟のスジエビを食べてみました！

私も収穫のお手伝いに行ってきました！そのときに手に入れた空芯菜とスジエビを調理してみました。漁協の増井組合長さんの話によると、スジエビは、子どもの頃、母親に頼まれて、よく「エビおさえ」（アミで潟端に隠れているエビをすくい取る）に行ったそうです。その日の夕飯のおかずの天ぷらになったとか。



シャキシャキとした食感が味わえるオイスターソース炒め



スジエビのかき揚げ



スジエビは、空芯菜の茎やひげ根にたくさんくっついてます！ほかにもテナガエビやザリガニ、ライギョの稚魚などの棲家になっていました。



ちなみに、左の写真は、鳥屋野潟産の空芯菜の料理方法を知ってもらおうと、9月にいくとびあ食花・食育センターで相楽さんたちNPO法人新潟水辺の会ががってんプロジェクトチームが主催して行われた料理教室の様子です。

講師は、学校調理実習の指導や、がってん事業で空芯菜のお茶を研究開発しているシェフの佐藤豊さん。

鳥屋野潟の「もったいない栄養分」で育つ空芯菜に関する取り組みがどんどん広がっていくといいですね。



新潟市潟環境研究所所長 大熊 孝からのメッセージ

当研究所では、越後平野の潟と人との共生について、分野横断的に「潟」を読み解く本『みんなの潟学—越後平野における新たな地域学』を刊行しました。執筆は調査・研究に携わってきた研究員を中心とし、多様な視点からふるさとの潟の姿を明らかにした一冊となっています。潟に接することがなかった人にも理解してもらえるよう、巻頭にはさまざまな写真で潟を紹介し、本文ではわかりやすい表現や資料を用いることを心掛けました。

「潟」の存在は新潟市という都市の「個性」です。潟は本市の宝であり、いまなお全国に誇れる地域特有の文化を創造し続けています。この本を座右におき、この知見を次世代に繋げてほしいと願っています。さあ、みんなで「潟学」を始めましょう！

『みんなの潟学—越後平野における新たな地域学』（A5版 144頁）新潟市潟環境研究所編

2018年11月 初版第1刷発行 ISBN 978-4-9910471-0-7 この本は非売品です。市内の図書館で貸し出しが可能です。

『みんなの潟学』書評

中静 透／総合地球環境学研究所特任教授・プログラムディレクター

新潟って、どんなところ？米どころ？みなとまち？水の都？…。そうした新潟のイメージを繋ぐ重要なキーワードが「潟」である。この本では、かつてこの地がいかに潟の多い場所であったのか、その理由を越後平野の成り立ちから掘り起こし、豊かな恵みとともに様々な試練ももたらした潟環境を人間がどう利用し変えてきたのか、その歴史の尊さと反省を踏まえて、潟という地域の宝を活かした「最先端」の都市のかたちを提案している。

信濃川と阿賀野川という大河がともに注ぐ越後平野には、水はげが悪く酸素の欠乏しやすい土壌をもつ低湿地が広がっていた。しかも、時には洪水が起こり、大きな被害をもたらしていたが、洪水の水や土砂は、流れの速い本流には溜まらず、潟をはじめとする低湿地がそれを受け止めていた。それによって、新潟は天然の良港としての条件を与えられた。

越後の先人たちは、そうした低湿地をコメ作りに適した環境に変えると同時に、洪水の危険を回避するために、数多くの放水路を作った。それは、「水との闘い」であり、結果として肥沃な米産地を勝ち取り、洪水の危険性は大きく低下した。川の流れは細く弱くなり市街地が広がった一方で、港では浚渫が必要となった。これまで私たちは、こうした闘いに勝った歴史を、科学技術の発展として誇らしく思い続けてきた。

しかし、こうした歴史によって潟はどんどん減ってゆき、あふれるほど獲れていたドジョウやウナギが減り、特有の生き物たちもつぎつぎに絶滅し、潟のめぐみを次々に失ってきた。洪水を防ぐためにも、無粋で大きな構造物を作ることばかりが進み、長く苦しい川との付き合いの中で培われてきた「賢い」防災技術がすたれてきた。湿地が本来もつ水質を浄化する機能は弱くなって、街中を流れる水路の水は汚れた。私たちの生活は水辺から遠のいて、

独特の利用のしかたや文化も失われつつある。子どもたちにとって川は危険な場所となり、水辺を楽しむことも難しくなった。それらの変化は近代化ともいえるかもしれないが、新潟の産業や文化の魅力と特徴を薄れさせ、さらには生活の豊かさや快適さを失うことにつながっている。この本は、私たちがほんとうはこのことに気づき始めていること、そして新しい方向性に歩みだすべきであることを、わかりやすく教えてくれている。

最近、潟をはじめとする沿岸域の生態系がもつ機能の再評価は世界的にも進みつつある。今や、沿岸域の生態系がもたらす恵みや働き（生態系サービス）を経済価値評価すると、おなじ面積の熱帯雨林よりはるかに大きいことがわかってきた。ラムサール条約（湿地の保全に関する国際条約で、佐潟も指定を受けている）でも、個々の湿地だけではなく、それを含んだ都市に関しても認証が始まると聞く。16もの潟を有する新潟市は、この指定を最初に受けるにふさわしい都市だと言えるだろう。いうならば、「新」しいコンセプトで「潟」を考え始めた最先端の都市「新潟」を世界が見つめているのである。

この本は、人間の営みと沿岸域の生態系の深いかかわりを知りその将来を考えることによって、都市と自然の在り方を探るために必読の一冊である。



中静 透（なかしずか とおる）1956年、長岡市生まれ。専門は森林生態学、生物多様性科学。千葉大学卒。理学博士。

森林総合研究所、国際農林水産業研究センター、京都大学教授、総合地球環境学研究所教授、東北大学教授を経て、総合地球環境学研究所特任教授（現職）。国際生物多様性研究計画科学委員、国際森林研究機関連合理事、日本生態学会会長などを歴任。著書に「モンスーンアジアの生物多様性」（岩波書店、共著）、「森のスケッチ（東海大学出版会）」など。日本林学会賞、松下幸之助 花の万博記念賞（団体受賞）、第1回みどりの学術賞、日本生態学会賞を受賞。

口絵

- ・ 潟に集う・潟に触れる
- ・ 潟に漕ぎ出そう！
- ・ 潟の恵みいろいろ
- ・ 四季のうつろい
- ・ 越後平野の生きもの
- ・ 越後平野の変遷
- ・ 明治後期の越後平野
- ・ にいがたの「潟」

I 越後平野の大地—成り立ちと開発

- 1 越後平野の生い立ち①
—川を引き寄せた地殻変動— …… 澤口晋一
- 2 越後平野の生い立ち②
—平野をつくった海面変化—
- 3 越後平野にはなぜ潟や池が多いのか
- 4 じゅんさい池、佐潟、御手洗潟の生い立ち
- 5 越後平野の自然的特徴と開発の発端
—大地の中の水を動かす— …… 大熊 孝
- 6 越後平野で最初に開削された松ヶ崎堀割
- 7 大河津分水と萬代橋
—越後平野の乾田化と新潟市の都市計画—
- 8 全国でも珍しい川と川の立体交差
—江戸時代の先端的放水路工事—
- 9 開発と伝承①
—馬堀の首祭りで見帯の首塚— …… 高橋郁丸
- 10 開発と伝承②
—鎌倉潟の大蛇・岩屋の七面大蛇—
- 11 開発と伝承③
—曽根のお仙地蔵と中野小屋のおさき地蔵—
- 潟のたね① 潟や川の名残をたどってみよう！
- 潟のたね② 二つに分かれた潟 鏡潟

II 生きものを育む潟

- 12 潟の生物多様性の価値
—エコトーンと生態系サービス— …… 井上信夫
- 13 ちょっと変？水辺の植物の生き様 …… 志賀 隆
- 14 新潟の水辺の植物—失われる水辺の植物たち—
- 15 北限のオニバス
- 16 小さい潟や水路に息づく多様な植物
- 17 外来水草の脅威
- 18 移り変わる潟の魚たち
—多様性が失われる魚類相— …… 井上信夫
- 19 姿を消した春告げ魚…ニホンイトヨ
- 20 繁栄する外来魚・衰退する外来魚

- 21 激変するカメ類の世界
- 22 海と川を巡る壮大な旅…サケ
- 23 海と川と潟を行き来する海産魚介類
- 24 ヨシと鳥たち …… 小林博隆
- 25 ハクチョウが新潟にやってくる理由 …… 佐藤安男

●潟のたね③ 水辺の植物を調べてみよう！
(道具編) (標本作成編)

●潟のたね④
マークオサムシー少し変わった潟の生きもの—

III 文化を育む潟

- 26 潟と共にあった暮らし
—複合的な生業— …… 隅 杏奈
- 27 全国的に有名だった亀田の泥鰌列車 …… 井上信夫
- 28 潟や田んぼで行われた狩猟
- 29 佐潟の名産と暮らし …… 太田和宏
- 30 潟に魅了された文化人
- 31 むかし 潟は子どもたちの遊び場だった …… 井上信夫
- 32 鮭の伝説 オオスケとコスケ …… 高橋郁丸
- 33 潟の主要水辺に棲むものの伝承 (福島潟)
- 34 新潟市内の河童伝説
- 35 河童が福島潟に住んでいる？ …… 大熊 孝
- 潟のたね⑤
神社やお寺はパワースポット？潟と社寺
- 潟のたね⑥ 砂丘農業—潟周辺の土地利用—

IV 未来へ向けて 潟と人とのこれから

- 36 日本人の伝統的な自然観とこれから
—山川草木悉有仏性— …… 大熊 孝
- 37 市内唯一のラムサール条約湿地
—地域における佐潟の存在意義— …… 太田和宏
- 38 みんなの潟 身近な自然と関わる …… 隅 杏奈
- 39 田んぼダムとはなにか …… 吉川夏樹
- 40 潟の水質改善と農業
- 41 治水機能保全のための潟の役割と対策
- 42 「土手論」から考える二一世紀の治水対策 …… 大熊 孝
- 43 潟の土の中で眠っている植物のタネ …… 志賀 隆
- 44 かつて残された潟群の保全のあり方 …… 大熊 孝
- 45 ラムサール条約都市構想
—自然と共生する都市へ—



潟にまつわる写真を巻頭カラーの口絵ページで紹介



読み切り2ページを基本として各分野から45タイトルを掲載

「潟」のエッセイ

9 佐潟を通じた私の取り組み

磯貝 尚輝／

新潟国際情報大学情報文化学部 情報システム学科4年



私が佐潟、赤塚に関わるきっかけとなったのは、地域との関わりをテーマの一つとする新潟国際情報大学の小林満男先生の研究室の学生として、2016年10月16日に実施された砂丘ウォーキングに参加したことです(新潟日報10月17日掲載)。同年11月6日には、佐潟ラムサール登録20周年記念事業として、赤塚郷土研究会と新潟国際情報大学が連携し「佐潟ぐるら今昔20年」と題した写真展示を行いました。これは赤塚郷土研究会の並松景政氏(故人)が撮影した20年前の写真(赤塚郷土研究会誌、第14、15号掲載)と現在の写真とを並べて展示し、この間の景観の移り変わりを比較するというものです。展示にいたるまでの作業を通じて、この20年間の赤塚の変化の大きさを実感しました。

2017年には新潟市西区農政商工課の事業として、地元の団体である「コミュニティ佐潟」「赤塚・中原邸保存会」「佐潟と歩む赤塚の会」「赤塚郷土研究会」「赤塚・佐潟歴史ガイド」等の会員と新潟国際情報大学の教員有志からなる「赤塚・佐潟地図研究会」を立ち上げ、私も赤塚・佐潟を紹介する『赤塚ガイドブック～まち歩き&砂丘歩き～』の作成に参加しました。これらの各種取り組みをさらに発展させるため、新潟砂丘遊々会(事務局：小林満男研究室)が組織され『新潟市水と土の芸術祭2018市民プロジェクト』にも参加しました。私は、事務局として3回の砂丘ウォーキング、シンポジウム、ワークショップの企画、運営を担当しました。砂丘ウォーキングでは一般の参加者の方々とともに佐潟の景観を楽しむことができました。

また、新潟市環境政策課主催の『佐潟の将来をみんなで考えるワークショップ』では、学生として佐潟での取り組みを発表し、さらにワークショップでは地元の人たちと一緒に佐潟の将来像について話し合いました。これをきっかけに、ワークショップに東京から参加していた法政大学の学生たちとの交流に発展しました。潟舟に乗せていただいたり、佐潟を眺めながら地元のすいかをいただいたり、誰よりも佐潟を満喫できた1年であったように思います。

本学に通う学生として、これからも地域との関わりを大切にしながら、一緒に赤塚・佐潟・新潟砂丘を楽しみ、地域としての可能性をさらに広げていけるようお手伝いをしたいと思っています。



先生たちと佐潟で潟舟に乗る磯貝さん(右から3人目)

新潟市潟環境研究所について

本市には、地域の暮らしに根差した「里潟(さとかた)」ともいうべき個性豊かな潟が多く残っています。当研究所は、これらの潟と人とのより良い関係を探求し、潟の魅力や価値を再発見・再構築するため、平成26年4月に発足しました。

潟に関わる多くの皆さまと連携しながら、自然環境や歴史、暮らし文化などについて、調査・研究を進めています。

新潟市 潟のデジタル博物館

NIIGATA City Wetland Digital Museum

新潟市内に点在する湖沼「潟」に関わる資料や情報をまとめたデジタル博物館です。

URL <http://www.niigata-satokata.com/>



発行

2018(平成30)年12月

新潟市地域・魅力創造部 潟環境研究所事務局

〒951-8550

新潟市中央区学校町通1-602-1(市役所本館4階)

☎ 025-226-2072

fax 025-224-3850

e-mail kataken@city.niigata.lg.jp

URL <http://www.city.niigata.lg.jp/>

kurashi/kankyo/kataken/index.html

Facebook
ページ

